



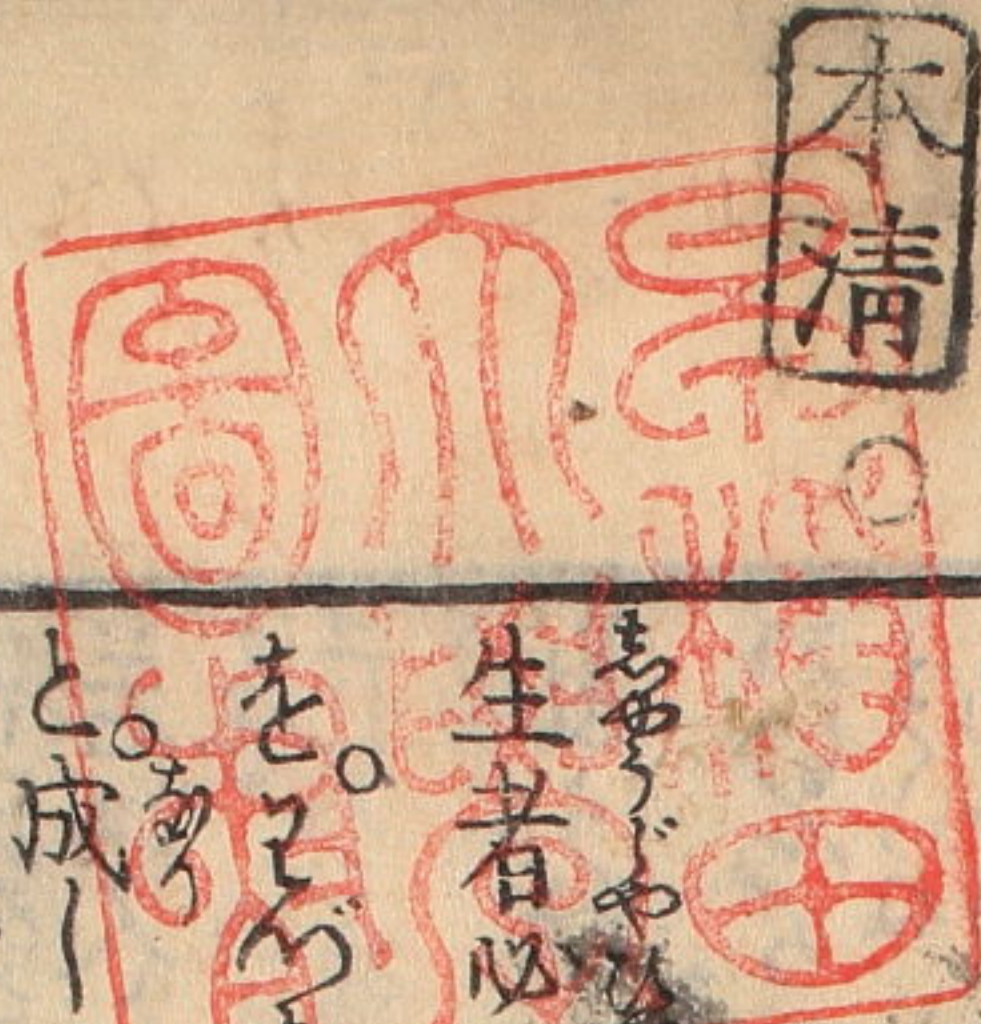
安永廿管
 壬元赤博
 繪本輪廻物語
 五

13
 973
 5



安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之五

本清



門遠13
清 973
卷 5止

あべのどうとまきと あむむ 附 あーやどうきん 正
 安部童子京都は赴く 芦屋道満の支 あべのどうとまき
 生者必滅會者定離常の事と云ひ どうとまき 童子六九年の歳月
 を いしや 一夜と思ひの外祖父保憲は母也も まき 既に此世は亡人
 と成り あ 夢々現あも知らぬ いんが 因果ぞとい い どりえらぬ飛花
 流水 あ せめて六父は老樂を ま させ あ せんと思えども かん 顔色常は勝
 をぬ あ いらあふ事やと問われ あ 保名忽波を流し あ 我少年の昔よ
 何卒先祖の家を興し あ 身を立 あ 名を あ 顕 あ さんと あ 思ふ あ 甲斐
 あく あ 折果 あ 折 あ 去月九月廿四日 あ 大裏 あ 悉 あ 炎 あ 燒 あ して あ 此 あ 度 あ 道 あ 宮
 成就 あ 了 あ 帝 あ 内 あ 裏 あ へ あ 移 あ り あ 其 あ 夜 あ 後 あ 涼 あ 殿 あ 震 あ 動 あ して

論廻物語卷五

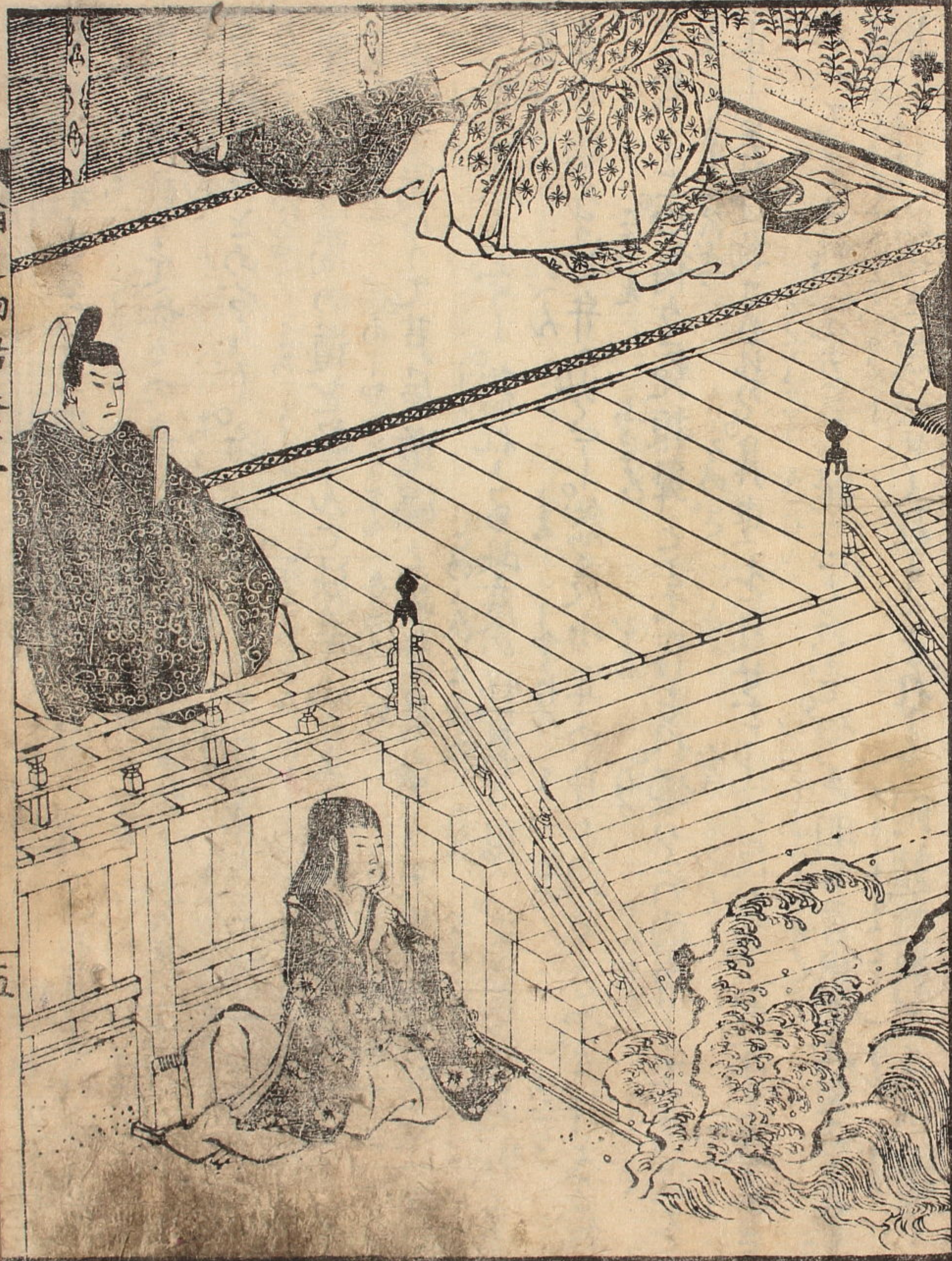


止ざる由是に依て諸寺諸山の祈禱。頭密二流の力あり静るぬ
 る故。此度陰陽頭を召さる。あま天災あらんやとの畏れを以て。爰
 播磨国印南の卿は不測の天文者あり。こゝに播磨元方公の御
 取次として。今都へ上り。専祈禱及ぶ由。これハ芦屋祝部清太
 一子芦屋道満と名乗て。陰陽卦卜の道その妙は通せんとして。
 若此人とのしびの震動を鎮め。天下の陰陽頭とありて。末世は
 花を残りて。我ハ日蔭の紅葉々と。折果ん事口惜なれど。勅
 勤うけし保憲よ。智勇の縁あれば。都は出るも憚ある。かくて
 ハいり心願をとぐる時節のあふきと心よあふきとあまあり。顔
 色常あらざるも其故と。身の薄命を物語ま。童子はちま
 ち喜こびりげぬ。今下りて承あらる。都の大変。これぞ父の願ひを

満く。家を興へた時節あり。我不肖なれども年来父の教え
 を受。更ニ実母の神力を受つた。其上此度龍宮の奇蹟や。つ
 天駭の無心死古又ハいなり。幸あるが小野長古公。智勇兼備して。
 志るも廉直のよう承あられ。此人よとて。内裏鎮護の事と申
 し。推挙し。あらんハ必定あり。其時祈禱の術をつく。内裏
 震動を即時よ志めて。天文陰陽頭ハ某これを承あらる。絶く
 久し。此家の名を。天下末世は。あまんと。まものま死よ。まれば。保
 名も兼て。あま。此者の九あり。とて。心は。居なれば。兎角の言ふ
 も及び。彼が心よ。あま。都を。あま。山門の
 王寺の山門に至る。聖徳太子は祈願して。暫く山門の礎は。休
 となれば。東西より鳥二羽と。あま。山門の屋根は。暫く留まら。故

童子竜仙丸を試ころ此時と左右の耳よりさういふ心を通
 して聞らるよ。不思議も人のものいふ如くして其方の何方より何
 方へ往るぞいふ我の都の鳥あるが。紀州熊野へ行。叔も都より去年
 の火災此度の造管有てより。毎夜震動も是より依く大内守護
 の三十六社を初め。神明加護を祈まども駭あ。佛法へ南都北嶺
 真言天台顯密二教の僧祈まども印あ。本山當山の修験者
 いのまども駭あ。當時播州より。陰陽家来りて祈は。地震動
 づつと冷づく。終は帝の御腦とあまうと云なれば。それ不思議
 我の熊野の鳥あるぞ。我の王法とて災難ある時の佛神は祈
 る。夏旧例あ。今神明の納受もあ。佛法の威力の顯りま。さ
 り。あ。けぞと問は。都の鳥が云。是皆彼人の崇之後涼殿の

乾の角の柱乃下。虫類二あり青色の蛇大あり蛙を追。追
 り故と私語。熊野の鳥。実りさ。あ。ん。佛神と。彼人を惠
 り。佛神は祈は。あ。有。早。其。二。の。虫。を。と。り。て
 鴨川に流し。彼人の翼を添ま。死。と。さ。ひ。は。物。語。て。又。東。西。に
 飛。去。ま。る。童。子。よ。く。聞。濟。し。て。彼。人。と。い。ひ。さ。と。考。え。暫。あ。り。て。營
 公の冥魂あり事と知ま。斯。程。あ。く。都。に。上。り。保。憲。以。来
 の縁は依り。小野。吉。御。を。と。の。と。一。処。此。時。橋。元。方。威。勢。が。新。り
 る。井。如。く。あ。り。て。道。滿。を。推。奉。の。折。り。ゆ。え。美。吉。御。あ。り。て。井
 三。子。を。推。奉。ま。る。と。も。能。ら。ず。其。上。彼。が。才。能。の。得。も。知。え。ず
 一。と。あ。く。美。吉。御。置。れ。る。童。子。の。早。く。其。機。を。察。し。て。さ。い。は。れ。し。と
 の。柱。を。示。さ。ん。と。や。思。ひ。入。り。日。々。洛。中。洛。外。を。往。來。し。て。其。時。節。と



芦屋道



安倍童子
 芦屋道満と
 術を競る因

其場の別をひらる。斯く飯館の後竊道満を召され。今日参
 内の路次して如々の童子は逢一由委仰られ。道満手を組
 思案とめざら。近頃憚り申度あり。其幼年の昔も何
 卒天文陸陽の道を極んと。法華山より上りて。法道仙人の仕へ道の
 一字を賜りて。芦屋道満と名乗居あり。天災地変を考へ十に
 一もふとふとあり。然れども此度の怪異は限り。天変とも地怪とも
 其分明あるを弁し。然るに幼年の身を以て。さやど祥あるを
 かせしと心得が。其振舞とこそ存ざれ。願りの面會して真偽を
 正し。若怪物もひら。其座を立せ。化の皮剥け。其ふと拳とこ
 して。何れが。元方にも疑念たれ。何れ明日召出さる。其ふと
 其刻對面の上。説破せしれ。と。それより閑話敷刻は及び。願て

暇を賜り。京都変災の起り。去年天徳四年庚申九月九
 四日大裏炎焼し。今年改元有と。應和元年内裏造管成就
 て。帝新宮は還幸や。はと其夜より。後涼殿震動して止む。是
 依り。内裏守護の神社。南都北嶺。顯密二宗の字匠丹祓を
 揮といふも尚止ざる。故に高明親王或は橘元方等の吹琴は依て
 芦屋道満内裏は伺公し。陰陽の術を以て。是を退ると。是れ
 も其験あり。却て帝の御悩甚し。とぞ聞へ。是は依て同
 年二月九日。殿下忠平公中央は望し。公御衾の折ら。右大弁
 橘元方。芦屋道満を召連。参内有て。殿下忠平公は向ひ言上
 あつ。其昨日御築地の外して。希有ある童子は。出逢ぬ其様
 下賤は。此度林中怪異の美を。未だ知らず。其は処心得

難死と多死。今朝御白洲へやうり出べ敷上申有置いと其言い
 やと終らざるに兼て元方公より案内有れば。奈根小野も古卿
 寛仁優美の粧めて柔和あれども怖れ。伊豫純友が逆乱を西
 海の波よきうちめ。武勇の覚有あつら。勇氣もわらふと母常
 安部童子を召連て。擲ちく伺ふあれば。童子は白洲に躰置せ
 り。時は殿下忠平公仰出さるる。今元方の言めて童子がと聞ぬ
 今又も古召連らる上うら定て様子も有べれど。其の追て沙汰
 せし。先才一は今般の怪異を取鎮むべ覺え有やと仰有れば。
 若古卿各若年者の何条覺えの思死。まあ彼も由緒ある
 術家の末より命は依る隨分祈らせし。と有れば。忠平公
 喜悦の体して然る。元方も古より。村らひ召されよと仰あり

なるも。両臣領事。いつとも其術の勝る者といふ。内裏鎮
 護の祈禱を計らんと。先元方卿道満は向ひ杖は術をまき。む
 道満白洲の石を四五。取く口は呪文を唱えれば。忽ち変て四
 五羽の燕と。翩翻として階前を飛め。皆く声を揚ぐ。驚
 歎する。童子少く膝をまき。二三度彈指すれば。元の石
 とあつて。落るるゆ。其時童子杖程の竹を取。白洲を少く四
 め。水を湛ひて呪ふ。水は沸き。湯出く。靴の向は庭一面
 のま。水は心消るる。堂上堂下。皆く二人の術を感。思
 忠平公も驚歎の餘。先暫くは息有べ。旨。仰付ら。とて
 ありが。これ

輪廻物語卷五

あり安部保名の子と察せり。凡今日本は此人ありては不思
 後を申ののほゆ。然れども此人年已はたは近し。今小童の取
 あり白狐の通力を受てあふんと。童子は素生東壁を鏡は掛
 て見如くはやせし。是又凡夫の処為あふんと感せぬのあり
 くとぞ。元東道満が。前白洲の石を燕とあせし。非情と有情
 ありその術之然るを童子彈指して本は復すと。今又童子が掛子
 とさうて鼠と云くと同じ術あつた故に鼠山出る処を道満彈指
 て本へ復し。是本来掛子あるとと頭して其術を見せんと思ひ
 又童子早く其機を察し。間髪と入まば追ちせし。後之鼠
 其室は有ざらんれば。座中の面々其掛子とあると疑はらざ。是下石
 の上の童子が左足と云べ。後は見れば鼠の堀の外縁の下めて。

本の掛子とありしと云。されば童子も道満が言は驚死。実は是
 下ハ聞しはまゝ術者あり。其過し天曆の初夢現と云弁は龍
 官城の地を踏ぎ。僅一夜と思ひし。人間の九年あて。天徳の末は
 當れり。今故元有る。應和元年。然れば道満の考え掌を指が
 如し。但し某が昔時の形変じざる。龍宮の秘符あり。我又こ
 是我知まるとぞ。答へる。殿下忠平公再度仰出さる。此度の怪異。道
 満是を加持されども未制まるとぞ。得て童子是を制し止むべし
 や。童子僅く其摂洲天王寺の山門に於て。不思議の鳥籠をうけ
 ありぬ。此度は限らざ去ぬ。天長八年の雷災。天徳四年の火災。
 皆共は菅相丞の御崇あり。是道真公の實は崇あり。此のあり
 ねども。彼君今十六萬八千の眷属有る。折々崇とあり。然れども



時
時
時



是又先帝の由々敷御誤也。天是は命して崇有と承し奉りぬ。
 御門の正し醍醐帝才十四の宮にて在せば、御父帝の御誤今に
 至りてあを逃さざらんとあふべし。然れば菅相丞の冥を厚く奉り奉
 てこそ御恨却く鎮護の神と成りんと何の疑うゆりんとりよまご
 殿下忠平公直は奏向有く菅公の冥は大政大臣正一位を賜ひ洛西
 北野は大社を授西大威徳天満大自在天神と奉り奉り。不
 思儀ある哉此程日夜の震動祈禱終驗と用ひむとて忽ち徳ゆり小
 ありにたる。是よりして内裏守護三十六社の一と顕れもひ天下梅花
 の主乾坤文字の祖と末代は御利益を施しぬ。究有難き。是皆
 童子の功と。主上奉感の余り。改めて童子は官位を賜り。従四位
 上兼主計頭は任せし。安部晴明と号し。天下陰陽頭天門博士

を賜り。一条堀河の西は居宅と構え父保名を攝州安部
 の野上と迎上せ絶て久し安部氏の家を再興せし。目出度
 けれ。然るは蓋内傳の一書。加茂保憲より保名傳へ晴明又
 保名より傳え受ると雖口授面命の傳あはよる。是を聞くと
 是能り。是小依く俄に入唐の願をきし。出し。父保名今抱の
 と六才子道満は頼を置頼り唐土は渡られたる。維時六十二代
 村上天皇の應和年中ありて。唐土の宋の大宋皇帝建隆年中は
 音田まろしとぞ。斯く雍列の城刑山よりんとせし。吐山の名は南
 高山。巖をむしりて削りて。菅滑りして登り得る人あり。
 此山は白道といふ。大仙人あり。往古天皇五基山の文珠大士より
 天文の書を授け。是は唐土石末の奇規を考え合せ。一書に

是を金鳥玉免集と名付し之實は天下無二の奇書ゆて唐帝
 代々の珍藏とて我朝元正帝の天龜二年中。復書を所望のこ
 め勅命は依り。安部仲磨入唐せし。其時の帝玄宗皇帝格
 と。渡りし。程なく仲磨安祿山の所計は依り死去せる。其後
 再度吉備大臣渡唐して。遂に其書を乞受。是を日本に傳ふと
 以て。然るに今晴明の仲磨の未ゆて。計らむ加茂保憲よる。この
 書を受る。奇あり。保憲又吉備大臣の未之。然るに只書のそ
 有て傳あらざる。故に晴明入唐して城刑に到り。此書の傳を白道
 仙人に傳はらんと。千辛万苦して。已に山八合まで攀上りし。實や峰
 一六老松枝横らる。て一斤の雲を帯。岩間より水飛流して。恰も
 布を瀑きよ似らる。よとは絶妙の佳境あり。暫く岩上は腰う

ちうは仰せられども。登べた便を失ふ。いづれかと思ひ。折節山
 の絶巔より。振鈴の音をきく。不聞えし。忽ち晴明が前より頭
 きたり。上人身ある木の葉の衣を纏ひ。鳩の杖に。杖は杖。重顔雀髪
 飄然として。世外の人なり。晴明おもむき。頭を低膝を屈めて。礼
 をつく。いづれ。上人は使然として。御声ゆて。あはれ。珠も安部仲磨往
 昔。陶元の頃。そる。此地は来し。あれども。遂に素志をとげ。ざる。よ
 今又。此は来し。まら。め。の。問。あ。は。晴明。謹で。其。安部。晴明。と。P
 日本。の小童。同。安部。氏。を。名。乗。り。仲磨。あ。は。れ。な。こと。答。り。ま。は。ば
 白道。笑。て。汝。隔。生。即。忌。の。習。ひ。を。え。汝。は。正。しく。昔。我。邦。に。来。つ。し
 安部。仲磨。が。後。身。あ。り。て。母。の。白。狐。ハ。元。来。此。國。維。州。の。官。人。玄。東
 が。妻。隆。昌。女。父。の。保。名。ハ。滿。月。丸。の。末。子。と。師。と。い。ふ。も。加。茂。保。憲

吉備大臣の末流。皆是前生の一念。引て後身。願ひを成就す。
 萬代不易の曆道を立すの。然るは金鳥玉兒集。八十三ヶの
 傳あれ。今汝。是を授くる。とて。四寸四方の管を出。清明受い
 して。是を開く。とて。何思ひ。又開。も。不思。後。や。其
 父の教を受。と。ト。白の道明。其。上。母の通。力を。え。去。頃。我。朝。禁。廷
 六。棋。子。を。鼠。と。変。む。る。や。ど。の。其。あ。る。今。僅。あ。る。管。の。中。の。知。さ。ご
 残。念。さ。ま。と。い。ひ。た。れ。ば。白。道。笑。く。汝。千。里。の。外。の。知。さ。と。僅。あ。る。そ。の
 管。の。中。の。知。と。能。ハ。ト。是。ぞ。金。鳥。玉。兒。集。八。十。三。ヶ。秘。傳。の。管。之。其。管
 を。開。く。心。を。盡。し。終。行。せ。ば。其。傳。ハ。得。べ。れ。と。汝。が。終。忽。は。縮。り。て
 且。又。不。慮。の。災。難。あ。り。又。管。を。開。く。と。ハ。龍。宮。城。の。秘。符。に。依。り。長
 生。不。老。あ。る。と。傳。え。れ。ど。傳。を。得。る。と。ハ。あ。り。と。管。を。開。く。傳。を。受。る。汝

開く。と。して。長。生。さ。る。故。取。捨。如。何。と。問。な。ま。ば。晴。明。笑。ひ。て。い。ふ。
 年。の。終。を。保。と。る。厄。と。あ。り。て。全。く。さ。ら。ん。と。朝。の。道。を。聞。く。と。い
 死。と。と。玉。と。成。り。碎。ん。と。我。元。来。の。願。の。数。多。の。秘。傳。を。傳。へ
 え。と。曆。道。を。天。下。に。開。く。死。と。と。い。ひ。り。と。願。く。と。管。を。開
 く。傳。来。り。預。け。ら。ん。と。地。は。平。伏。し。て。云。な。れ。其。時。白。道。志。を。ら。り。や
 晴。明。速。に。管。を。開。汝。が。身。の。災。ハ。我。又。思。ふ。旨。あ。り。と。て。頓。て。管。を
 開。く。と。是。より。晴。明。白。道。仙。人。と。い。ふ。と。三。年。採。花。汲。水。の。い
 と。あ。り。と。世。に。千。日。が。向。芽。を。刈。と。り。白。道。其。道。の。為。り。困。苦
 て。合。心。り。あ。れ。を。感。ず。後。日。の。災。を。拂。り。ん。が。為。り。支。珠。の。像。を。作。て
 山。の。頂。上。に。安。置。し。傳。授。悉。終。り。歸。朝。の。暇。を。賜。り。時。三
 禁。あ。り。酒。の。大。酒。二。ツ。女。犯。三。ツ。争。論。若。内。一。犯。を。時。災。其

輪廻物語卷五

十一

年を出せ。二つを犯す時、其日を出せ。二つを犯すと、災其日を出せ。とぞ戒る。晴明一々教戒を受。此年頃の札を述て、城刑山を下り、多ふ不思儀ある物入唐の時、十二の小童へし。つづる三年の間、壯年の男子と云ふる。白道入口、投面命の言を開きて、ふよう。龍宮秘符の破し、ことしを聞へ。ぐくて程なく、飯朝と聞へ。く声やどきまらね。ちかぢかぢか。あ。とちう。まぢまぢ。やちやちや。屋道満兼て橘元方卿と示し合せ。途中、待受く。一条堀川乃居宅へ飯さき。主上御待兼の言を述べ、述て直よ。奈内をとげさせ。ゆ。曆道の傳残り、知なく。傳へ。旨。奏聞よ及び。此時橘元方卿ハ、隠謀の企頓あるよう。晴明世に在る。謀反の頭んとを恐れ。時日を延させ。今日此席坐て殺さべし。兼て計ごと設け置れ。道満先年よう。元方卿の荷擔するに。前、晴明は入門して、第

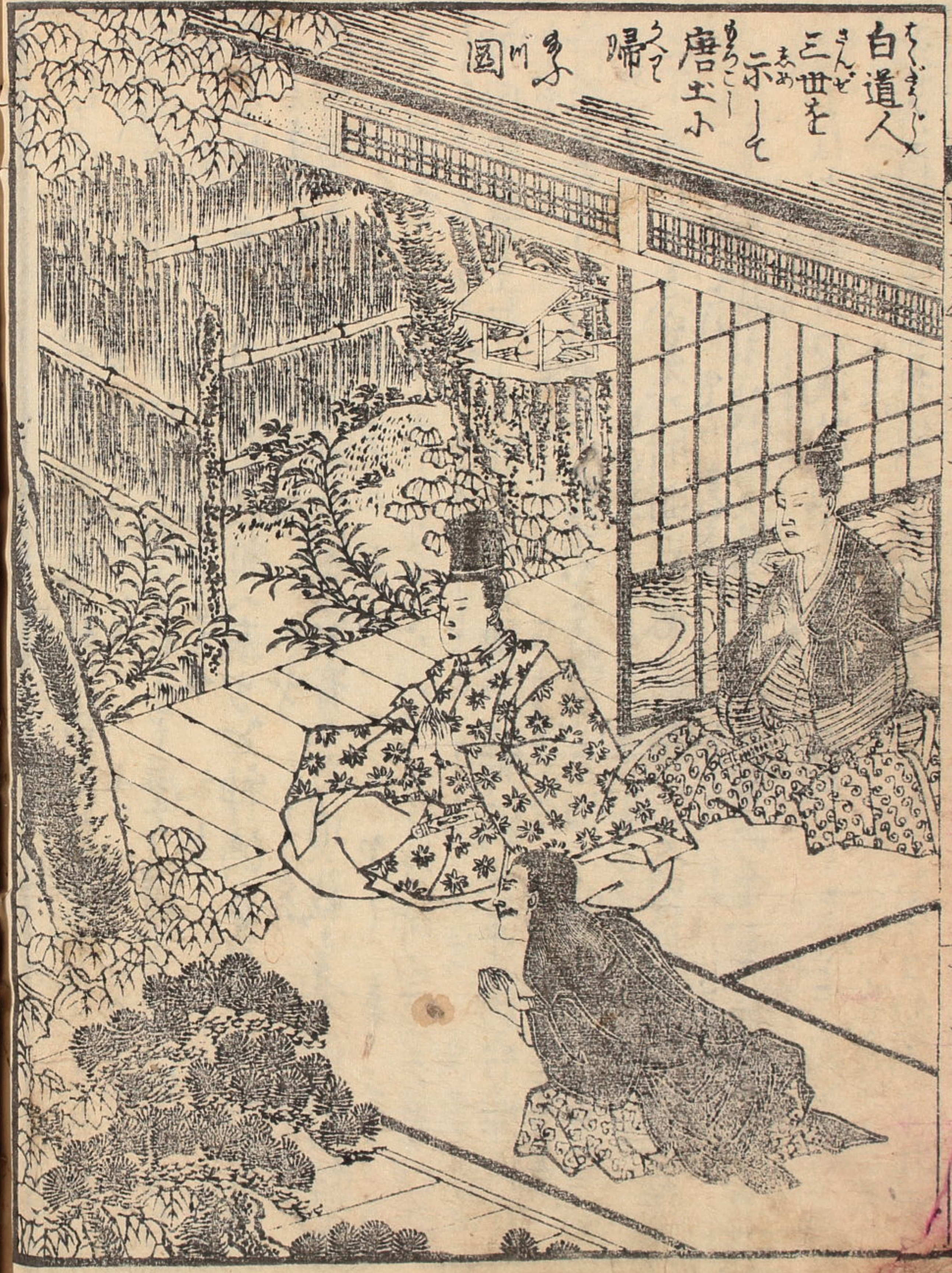
子と云へ。其及ぶるを知し。依る。彼は、逆つた折を見て、殺害せんとの心あり。と師牙の毛を結び、敬ひつゝ居しとあり。橘元明奸計。安部家再興繁昌の支。斯て殿下忠平公。晴明は御對顔有て。三年の間、壯年の男と云。いと問ひ。晴明言を開けし。始末。祥々より上なるは、忠平公。感悦斜あき。先其日の喜びとて。南殿ゆて大極殿の樂を奏し。あひたる。此時右大弁橘元方卿、幸ひとも思ひ、神前の神酒を金銀の器より。小侍従とら。年十八計ある官女、持せ出て申され。其方此度恙なく飯朝せし。殿下忠平公御満悦ありて。天をうら。奏向をとげんと。則大極殿の御酒を下し。且又其方三年の間、壯年の男と云。婦毒を

授け家の繁栄を祝せよとの御沙汰は依り。幸ありき。此小侍
 従とらふ命婦。年の頃も似つるを元方媒妁せよとの向此
 神酒を以て。夫婦婚姻の盃を仕れと申され。晴明心中大
 驚。白道上人の三禁を破さんと思ひ。葎を申す。忠
 忠平公の台命有難く。殊に高位の御取成し。身は餘り。下
 けあり。次牙に存し奉る去らざる。其入唐のせよ。畢竟曆道
 興隆の爲。然るに城刑山の白道上人堅く命じて三禁を破る
 一。め。其三禁と申す。牙一酒。牙二女犯。牙三争論。今も命に
 従ふ時。三禁の内。牙一。破さんと思ひ。深くあげ。く。り。ん。ん。
 曆書成就仕る。逆ハ御免を蒙り奉ると願ひ。元方色を正
 うして。汝が師の坊と頼む。漢土の沙門之酒を禁め。め。ろ。を。戒

一む。さ。も。有。べ。死。ま。あ。れ。ど。も。在。洛。の。身。ハ。雨。ら。む。や。う。て。我。邦。ハ
 神国也。伊弉諾伊弉册の昔より。麻呂傳へる夫婦のまら
 是を捨る。其の有べ死や。且神へ奉らと神酒と云。やうて。賢所
 の神鏡へさ。上。外。の。神。酒。あ。る。と。有。る。く。頂。載。ま。さ。斯。固。辞。ま
 る。何。ま。ど。汝。斬。く。唐。土。は。在。る。い。づ。ら。は。法。師。の。道。を。尊。び。我
 神国の道。を。忘。れ。其。上。今。日。賜。る。神。酒。忠。平。公。の。台。命。ハ。小
 侍。従。を。と。ら。ふ。命。婦。身。不。肖。あ。ら。ず。此。え。方。但。し。晴。明。ハ。不。足。有。や
 と。不。肖。げ。よ。ま。え。が。晴。明。思。慮。し。て。叔。上。人。の。命。あり。と。仰。られ。し。
 此。ま。あ。ら。ん。是。を。破。る。火。難。あ。ら。ず。是。天。の。命。む。る。也。命。の。ま。ら。は
 惜。ま。ね。と。曆。道。の。成。就。せ。る。を。悲。む。の。ま。ら。は。元。方。の。命。を。尊。び。元
 死。せ。が。再。度。生。を。賜。め。ら。し。願。ひ。を。果。さん。と。心。中。は。觀。念。し。叔。元



西園寺



白道人
三世を
示す
唐土小
歸
多川園

雜興物語卷五

十五

方卿は向ひ申さるる今日忠平公の台命は依り下し賜り神鏡の
 神酒と申し高位の方の御媒妁一應の辞し奉れり再應の辞
 退り却て憚り少くもと土器取らばしめがた三口村りのとや
 なる味甘露の如くあれども腹中は深きもろて心思忙然とさる
 の元明甚喜悦の体して見良の晴明今一つの仰ふ是非なく
 ひ受く三献を傾りて下は置なれば小侍従は遣まへるとの仰
 黙止ごご。遂は夫婦婚姻の盃まじや否前後深臆とて現のこ
 と。南殿のさうらうの筈出なるが遂はひさの間にたかぬ兼て
 示し合せしとあれど日暮過し至りて片屋道満迎の為とて
 出来たる晴明が供奉の者ああらざりて元方の家来は送られ
 一条小橋の辺ゆへ人知を殺されたる。此時漢土城刑山の絶頂

ある文珠堂故ありして一時は炎焼も白道上人これ日本の晴明
 身の上災難あることを知りて府君の法を行ひ多し晴明が取壇
 上は現われたる故に殺されし疑ひありと一字金輪の法を以て
 忽日本は飛来し行脚の僧の形とありて洛中洛外を尋ね
 られし一条小橋の辺は新なる墓あるを見て往來の人よこみ
 らるる晴明辰朝の日人知を殺されると埋めて墓を合せし由
 申さるやえ白道其夜深更に墓所を尋ねて晴明を驚かし招
 魂續命の法を行ふて遂は再度獲生らるる。晴明の御持掛が
 宅に至りて知らぬ顔は晴明が姿を向うが
 人知を殺されし由を白道上人は英て晴明を
 呼入る道満は見えたるを道満茫然として剣の席に

はるが如し。深時白道上人。保憲保仁。吉備道満。

女の後身ありて。暗明ハ正しく。安部仲磨の後身ありて。吉備道満。

物語板書。屋道満が。前生ハ仲磨の兄。安部仲磨の娘。

嫡子ハ生れあらず。家を嗣と能ざるを。積りて。仲磨の娘。

不盡ハ家を奪りんと。して。却り。果さず。今又道満が。植元明。荷

贍して。仲磨の後身。暗明を殺害。己き陰陽頭。とらんを

を行ら。皆前生一念の引。あよ。や。と。処。然れ。前身後身の

正。と。さ。る。依。り。殺。せ。し。と。思。ひ。暗。明。ハ。死。せ。し。其。身。度。の。死。

と。ら。ん。と。願。ひ。し。志。も。果。さ。ず。是。天。の。惡。を。受。し。故。に。又。暗。明。を。

前生ハ忠誠を守りて。後唐主ハ渡り。後身又道の為。身

を。行。ひ。非。義。の。事。あり。依。り。天。道。の。技。助。を。求。む。

一旦道満が。手ハ殺され。前生ハ兄の家を嗣。う。り。罪。を。と。す。

滅し。ぬ。れ。べ。今。ハ。少。の。障。り。なく。子。々。孫。々。家。門。繁。昌。疑。ひ。し。

道満又此理を。さ。す。早。く。志。を。改。め。あ。が。懺。悔。め。五。逆。十。惡。の

罪。を。滅。せ。と。あ。れ。ば。藝。道。の。德。ハ。依。り。と。も。名。を。あ。げ。ん。と。願

前あり。元是兄身同胞の間。前因ハ依り。た。と。一。時。の。恨。を。抱

く。と。も。過。て。改。む。る。は。憚。ら。ず。と。あ。ぐ。一。家。の。好。を。借。び。て。艱。難。相

救。吉。凶。相。助。る。時。ハ。自。他。の。幸。世。上。に。あ。り。と。過。去。未。來。の。事。ハ

至。道。弁。舌。水。の。流。り。如。く。理。非。分。明。ハ。申。ら。る。事。大。勝。本

敵。の。道。満。も。懺。悔。後。悔。の。色。あ。ら。れ。自。今。志。を。改。め。し。も。の

微。く。と。り。て。高。明。元。明。德。道。の。事。も。祥。り。と。物。語。ら。る。道。上

人。の。心。を。改。む。る。事。の。速。い。を。選。ぶ。喜。び。再。と。唐。主。城。前。山。を

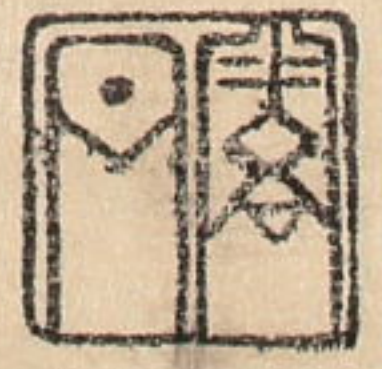
作者 洛東處士東麓



畫圖 洛北隱士島保躬



傭書 花洛一海本二



剖厥 洛陽井上治兵衛



加藤在止翁著

太平國恩理談 全五冊

此の書ハ神代古事記の意を採りて自
身胸中のたのしみを述べて人々を喜ばせしむるの
術を盡し外ありあり文小書意の自在を以て
人心を感ぜしむる未だの士あるは僕
の非を痛むる訓の士は著述しそ成り
けりて名とて人とするの概ひ一あらば
言に天下國家の幸慶はつとて是小書
やの概ありびと書ふれば半は神代
女老のにもに能く多岐會得を身神
傳傳の書は海を浮きたの概はつとて
はつとて美小座古事記を以てする
五冊

三教童論 全四冊

此の書ハ三教童論の位に入らず故に
書はく且おもしろく和歌の
悪を林の古歌等も事 忠孝の
幼き女小書とて書しこれハ
時ハ夜小書を以てするが
玉簫齋歌川貞秀画

古今武勇歌仙 壹冊

此の書古昔の武勇の名を
和歌を集めて六歌仙とて
也を歌を以て其首は
政を注し且其人は
ハ知事たりてあり
ハまゝ市道曲につ
本重信の書なり

鈴木濱洲先生著

温書益隨筆

全四冊

此書ハ國字ノ隨筆ニシテ推俗ノ考証
故ニ博物家モ座右ニ置ベキ書ナリ

遊仙屈鈔

唐張文成作 全五冊
伊時點

此書本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ
伊時ナルモノ神仙ノ譯ヲ得テコレヲ解ス
トイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

忠臣銘々傳

粉色入 全壹冊

此書ハ赤松ノ義士四十一人ノ個體志ノ
英位を奉て五國子大人の御流を
あさねり人地画手本の最なる刊

造物趣向種

全二冊

此書ハ氏神ノ祭禮他悉く
ふだのそとにありたるもの
人々ノ時儀ノ可なり
ついでに書きたるもの
ついでに書きたるもの
ついでに書きたるもの

同 貳編

紙刻

和對照書札

前後全二冊

星池泰先生書
漢對照書札
清朝人ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書
簡ニ翻譯シタレハ學向ニ益ニシテ且ツ
星池氏ノ書ノ尊養ナルヲ實賞スヘシ

書

林

京都寺町通佛光寺

河内屋藤四郎

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 貳丁目

須原屋新兵衛

同本石町十軒店

英 大助

同淺草茅町貳丁目

須原屋伊 八

同芝神明前

岡田屋嘉 七

大阪心齋橋通博労町

河内屋茂兵衛

同心寺通本町角

河内屋藤兵衛

